公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信　2016年4月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆私たちの探鳥会自慢・・・・・・・・・・・1
「たまりゅう（多摩川流域合同探鳥会）実施報告」
◆探鳥会訪問記 特別編 ・・・・・・・・・・5
（奥多摩支部リーダー研修会報告）
◆神奈川支部からの情報・・・・・・・・・・6
「効果的な勧誘について考える
～お試し会員の申し込みを増やすには～」
◆探鳥会保険集計結果・・・・・・・・・・・8
（2016年2月分）
◆普及室からのお知らせ・・・・・・・・・・10
・今年度も「探鳥会リーダーズフォーラム」を開催します！
・「探鳥会リーダーズフォーラム」の分科会を担当してみませんか？
・2016年「ツバメのねぐら入り観察会」の情報をお寄せください
・『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版の取り組み
◆今月の購読者数・・・・・・・・・・・・・14
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・・15
◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・15

◆私たちの探鳥会自慢

奥多摩支部と神奈川支部が合同で実施した「たまりゅう」をご紹介していただきます。流域に注目したこの新しい企画には、計216名の方が参加されました。

「たまりゅう（多摩川流域合同探鳥会）実施報告」

11月 渓流（御岳渓谷）	河口より72km	渓流環境として
12月 上流（羽村堰）	河口より55km	渓谷部の下、中流の最上部として
1月 中流（浅川合流点）	河口より37km	中流部の典型域として
2月 下流（新丸子）	河口より13km	河口堰があり、淡水域の最下部として
3月 河口（小島新田）	河口より2～0km	汽水・海水域として

■企画の経緯、全５回の企画概要
（神奈川支部／林庭弘征）

河口部の架橋案がくすぶり始めた頃。関東ブロック会議や個人的交流が基になり、多摩川流域で合同探鳥会を実施しようという話が湧き出てきました。最初の構想は、山梨県笠取山の水源から東京湾までの鳥と自然を、流域３支部で７ヵ所の探鳥会を冬の連続開催で比較できれば、というものでした。

有志で意見交換した結果、交通不便な源流部を断念、規模や調整の難しさを考えて２支部で行こうとなりました。実施期間も無理をせず冬のうちに終えればよい、実施個所は５ヶ所にまとまりました。

この５ヶ所を、２支部幹事３名ずつ６名の委員会で実行することに決定し、細部調整に向かうことで「たまりゅう」（多摩川流域合同探鳥会）は流れ出しました。

■当日の様子　（奥多摩支部／蒲谷剛彦）

第１回：御岳渓谷 2015年11月８日
小雨 参加者 約25名＋担当７名

たまりゅう第１回御岳渓谷。残念ながら小雨のため中止とし自主観察会とした。御岳渓谷は、

カヌー競技に使用される急流と、釣りに最適な瀞（とろ）、浅瀬があり、斜面には大きな木々が茂る。参加者からはまず、「川の音がする」との声が上がりついでカワガラスの登場で盛り上がる。雨のために用意していた紙芝居『鳥の漢字』をあずまやで実施、非常に好評であった。雨天でも集まってくれた参加者の反応にたまりゅうへの期待を感じた。

観察鳥種 18 種＋外来 1 種

第２回：羽村堰 2015 年 12 月 20 日
晴天 参加者 56 名＋担当７名

羽村は河口から 55Km、羽村堰から玉川上水が取水されている。河原に木々とヨシ原が広がり、カモ類、サギ類などの水鳥や、ヨシ原の小鳥、それらを狙う猛禽類が見られる。神奈川の方からは、自然豊かな羽村の景色に感嘆の声が上がり、次々に現れる鳥たちに「楽しい」との声を頂いた。また、「お昼ですから移動しますよ」との声掛けにも「鳥がいるんだもの」と足を止める参加者に、思わず笑みがこぼれてしまった。

観察鳥種 38 種＋外来 1 種

第３回：浅川合流点 2016 年 1 月 10 日
晴天 参加者 77 名＋担当８名

多摩川は幾つかの支流が流れ込むが、高尾山方面から流れ下る浅川が合流する中流域は広い中洲が形成され、植生が豊かな場所である。神奈川の方には初めての場所、奥多摩でも探鳥会を休止して久しいため、参加者からは「新しい探鳥地を紹介して貰って有難う」「今度は仲間を誘ってきます」との声を頂いた。また、合流点で梢にイカルが来た時にはイカルチドリを観察していた人たちから「まさかイカルチドリと同時に見られるとは思わなかった」との声が聞かれた。ここは丘陵が川に迫っており、山野の鳥も河川敷で観察できる場所である。

観察鳥種 47 種＋外来２種

第４回：新丸子 2016 年２月 14 日
前線通過の荒天から晴天
参加者 18 名＋担当７名

新丸子は調布取水堰を境に淡水と汽水域に分れ、環境も変化する。スタート直後の前線通過のため本降りの雨になり高架橋下に逃げ込む。雷鳴が去るとチョウゲンボウが飛翔し、ユリカモメが舞い、歓声が上がった。急速に回復した青空にヒメアマツバメ、オオタカと息つく暇もない。神奈川では過去に探鳥会を開いているが、奥多摩の方には初めての場所。両岸にそびえるマンション群、河川敷の運動公園と多摩川の流れに、「何時も見ている鳥も違った環境で見ると新鮮」との声や、広い川幅にも関わらず早く流れ下る多摩川に「川は生きているんだ」との声が聞こえた。

観察鳥種 40 種＋外来 1 種

▲新丸子での様子

第５回：多摩川河口　2016 年３月 13 日
曇り 40 名＋担当７名

たまりゅう最終回。河川干潟が広がり上流域とは異なる環境で、鳥種も大きく異なっている。奥多摩の方には初めての場所。スズガモやウミアイサ、河口名物のミサゴや、ハジロカイツブリの集団、ヨシ原を行き来するオオジュリン、と見どころが尽きない。羽田空港前の干潟では、ユリカモメが白い雲のように移動してゆく。「ただカモメだ！」と驚きの声が上がった。ここでは常連の（ただ）カモメも、奥多摩の方には銚子で見るものとの思い込みがあったようだ。また「多摩川河口」との碑を見て「最初の一滴から 138Km 来た。感無量」との声や、「たまりゅう良かったよ」と感想を得て、参加者の心の中で多摩川の流れが一つに繋がったものと思う。企画した甲斐があった。

観察鳥種 48 種＋外来 1 種

■実施してみて気づいたこと

（神奈川支部／黒田清恵）

準備に１年必要なのかと質問を頂いた。今回はプランが浮上し関係者の意気が盛り上がったのが 2014 年初冬であり、たまりゅう企画は冬場開催が望ましいとの共通意識があった。次の冬には開催しようと期限を設けることで「最低限まず何をなすべきか」課題を絞ることができ実施に結び付いた。結果として１年は必要だったことは以下に述べる。

最初で最大の壁は日程の擦り合わせである。その背後に「探鳥会企画をどう捉えるか」といったまさに文化的な違いを実感した。神奈川支部では企画の提出が遅くフットワークが軽い。

サブリーダーは主担当の采配に任せられるので、特に新しい企画では事前に人材を確保することが要となる。一方奥多摩支部では予め１年間の探鳥会プランと担当を出しているので、日程調整が必要で和を重んじる体質であった。

昨年５月に顔を合せて日程調整。このとき奥多摩支部では既に年間予定が決まっていた。そこから奥多摩支部の担当が空いている日を選び、まだ日程がフリーな神奈川が合わせる形で折り合いをつけた。「たまりゅう」がひと冬で月１回、計５ケ所で実施できたのは図らずも両支部の体質の違いがうまくかみ合った結果と思う。

探鳥会で必須な名簿・鳥合わせリストは、「協働」と謳っている以上各回共通が望ましい。「5ヶ所を 5 列にして渓流部から河口まで記入できる体裁なら、全体を俯瞰する資料にもなる」との意見に基づきオリジナルの用紙を作成した。たまりゅう版「やさしいきもち」記載を含めてよい出来と自負している。

参加費の問題も大きかった。神奈川は参加費を徴収していないが、協働＝共通であるなら全回通して均一の参加費を頂くことになる。

受け付けを２つにしてはとの意見もあったが、窓口によって対応が異なるのは不公平感を生みやすく、他支部会員やクチコミで参加した人に混乱を与えかねない。

苦肉の策として「相互乗り入れ」の体裁を採った。場所によりメインの支部とサポートする支部に分けよう。全５回のうち、御岳・羽村堰・浅川は奥多摩支部、新丸子・多摩川河口は神奈川支部が受け付けとなり、会費・名簿ともそれぞれの様式で対応する責任を負う。これはメールではなく顔を合わせて意見交換したことで「こじれる」ことなく答えがでたのだと思う。

「たまりゅう」はこのようにそげる点はそぎ共有できる点を優先してきた成果であるが、多摩川沿岸である東京を無視するなど怪しからんとの声もあった。企画の主旨を伝えきれなかった私どもの未熟であったかもしれないが、それぞれ東京の関係者にご理解を頂くよう努めたこと、現代表、元代表とも寛容な立場であり意見に齟齬のない点は申し添えておきたい。

以下、反省会の声をピックアック。各会の参考となれば幸いである。

＊「たまりゅう」の目的に関して

当日のレポートにもあるように、新しい探鳥地との出会いや、ちょっと離れた環境への興味、地元への新しい視点など、参加者から評価の声があがった。これは「鳥よりも環境を見せる」との担当の心意気が伝わった結果と思う。「企画した甲斐があった」

＊協働の現場

２支部で開催する以上参加者が増えることになる。担当としては嬉しいことだが、挨拶時に声が届かない、トイレ休憩の時間が押す、列が長くなってしまう等慣れない事態に苦慮した。

＊雨天時の対応

御岳は雨天中止、新丸子は開始時のみ雨も晴れに向かうので決行。会報での告知と現場判断の見極めは今後も大きな課題である。予備日を毎回設定する余裕はなかった。

＊連絡体制に関して

個人的にはこれが協働に関して最も大事な点と思う。

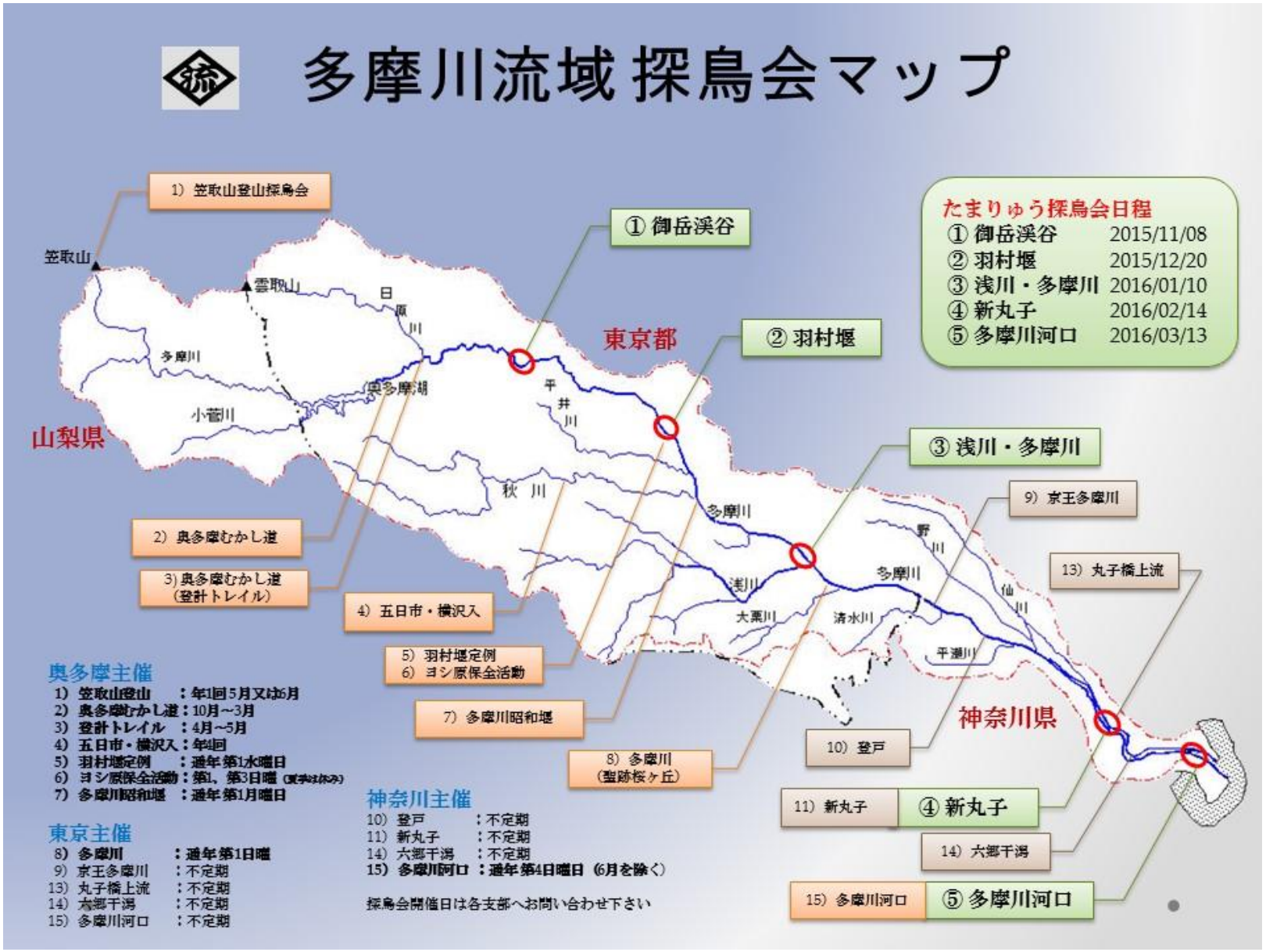
実際に膝突き合わせる時間には限りがあり、メール連絡が主体だった。合理的ではあるが複数名に宛て発信する側に対し、全く返信がない人もいる。メールチェックの時間がないのか、無言＝同意なのか、あるいは無関心なのか把握できない。返信の早い幹事同士で話を進めることになるが、一部で勝手に話を進めていると誤解されたらとの懸念もあった。メールグループを作る際、ある程度ライフスタイルを開示し、返信の有無などをお互いに理解しておけば余計な気遣いはなかったと思う。

■今後の展望

反省会では「スタッフの負担が大きい」との声があり、次回同様の企画を出すなら「リレー式」がよいとの意見がでた。**完全に協働するのではなく共通の目的を掲げた探鳥会を同じ時期に多摩川流域で共有する。**協働予定の各会にはご参考頂きたい。

意気込みに反して第１回の御岳渓谷は雨天中止となったが、後日、奥多摩支部が、「たまりゅう」ではない既存の定例会を御岳渓谷に振り替え、神奈川からの参加者にも配慮した時刻で実施。この対応もさながら奥多摩支部の探鳥会案内を神奈川支部報で紹介したことは協働の思わぬ成果だった。

流れを受けて神奈川、奥多摩、そして埼玉の３会で、支障にならない範囲でお互いの探鳥会・観察会のご案内記事を会報に記載する流れができた。近場の会の個性や取り組みを紹介する場となり興味や参加を頂くことで、野鳥の会全体の活性化に結び付くように願っている。



▲当日の配布資料（多摩川流域探鳥会マップ）

探鳥会訪問記 特別編 （奥多摩支部リーダー研修会報告）

３月１２日（土）に、奥多摩支部の研修会に財団普及室スタッフが参加し、支部と連携した探鳥会事業についての紹介を行うとともに、意見交換を行いましたので、その様子をお知らせします。財団の取組みを支部の皆さんに知っていただけるとても良い機会となりました。ご依頼があれば、他の支部でもこのような機会が持てればと思っておりますので、ぜひお声掛けください。

【日時】2016 年３月 12 日（土）
10 時～12 時
【場所】五ノ神会館（東京都羽村市）
【参加者】奥多摩支部幹事 10 名
財団事務局普及室　箱田、堀本、江面
【内容】

① 冊子を用いた名簿獲得と「探鳥会のご案内」の送付（堀本）

堀本より、財団事務局で実施中の、関心層への情報提供サービスの取組みについて説明がありました。普及室では「ミニミニ野鳥図鑑」をはじめ、バードウォッチングの入り口となる小冊子を制作し、希望者に無料でお送りしています。お申込みいただく方々の名簿は野鳥に興味を持つ人だけが厳選された名簿といえます。小冊子申込はがき（プレゼントはがき）を支部の活動地域で数多く配布してもらうことで、その地域の名簿を獲得することができ、ひいては、「探鳥会のご案内」をより多くの人に届けることができます。そこで、はがきを配布できる施設や店舗があれば、財団事務局へ紹介してほしいとの依頼がありました。

参考：探鳥会スタッフ通信 2015 年７月号『「小冊子プレゼントはがき」で入会促進』
URL:http://www.wbsj.org/info/shibu/tancho/staff201507.pdf

それに対して、意見交換したところ、支部の活動地域でプレゼントはがきが設置できそうな場所の候補が出されるなど、はがき配布を積極的に行おうというムードが高まってきました。

② 2015 年度「会員を増やすための探鳥会」の報告（堀本）

堀本より、2015 年 11 月～2016 年２月に開催された、「会員を増やすための探鳥会」についての報告がありました。報告の中では、12 支部と 21 回（雨天中止２回除く）実施され、参加者は 891 人（うち、会員でない方 799 人：90%）、お試し入会は 125 人であったことや、各支部の事例などが伝えられました。

質疑の中では「お試し入会への上手な誘い方を知りたい」「奥多摩支部の課題は大人数（100名程度）の参加者への対処方法。リーダーを増やす、コースや班分けを工夫するなどが対策と考えられる」「女性リーダーが多いと、会話が弾み、参加者にとって親しみやすい雰囲気が作れる。女性リーダーを増やしたい」「回数を年２回に増やし、スタンプラリー方式など別のスタイルの探鳥会を試してみたい」などの意見があげられました。

③ 入会することの意義をどのように伝えるのか？（箱田）

「探鳥会参加者に入会することの意義をどのように伝えるか」というテーマで意見交換をしました。

まず、箱田より「日本野鳥の会は、鳥から楽しみをもらっていると同時に、鳥に対して『お返し』をしている団体。そこが鳥を見るだけの団体との違い。では、その『お返し』とは？」との問いかけがありました。

それに対して、意見交換したところ、支部でおこなっている保全活動や調査など、探鳥会以外の活動が浮かび上がってきました。その他にも、リーダーが日ごろから「野鳥に何がお返しできるのか」を意識するだけでも違ってくるのではないか、といった意見がありました。

最後に、箱田より「調査や環境管理活動などで野鳥の生息地保全をしたり、野鳥に興味を持つ人を増やす手助けをしたりしていることが、支部の強み。また、支部ならではの特徴もある。それらを、探鳥会の参加者に対して、自信を持って伝えていいのでは。」との提案がありました。

（普及室／江面康子）

▲研修会の様子

◆神奈川支部からの情報

「効果的な勧誘について考える　～お試し会員の申し込みを増やすには～」

神奈川支部では、お試し会員を受け付ける「ひなどり会員制度」を設け、「会員を増やすための探鳥会」の他、一般の方向けの探鳥会などで入会を募っています。

ところがこのお試し会員への入会ですが、誘い方でずいぶん入会率が変わるのです。探鳥会の回数は限られていますので、できるだけ１回あたりの入会比率を上げる必要があります。入会を決めるのは最後は人の心が動くかどうかです。今回は人の気持ちを動かす「営業的」「勧誘的」な工夫によって入会の比率を上げることについて書いてみます。

■お試し会員制度

まずはこの「お試し会員制度」ですが、以下のような制度になります。

①探鳥会時に 1000 円をいただく。
②支部報「はばたき」が毎月計６回届く。
③神奈川支部のみの制度で本部の会員サービスは受けられない。
④半年間に探鳥会などに参加してもらって、６ヶ月後に正式入会を促す通知が届く。

本稿は前提として、お試し会員制度があり、一般の方対象の探鳥会を行っており、探鳥会としての運営がうまく出来ている場合を想定しています。

■参加者の気持ちの流れをイメージする

お試し会員になるかならないかは、探鳥会に参加している間に気持ちが高まり、そのレベルに達するかどうかで決まります。ここでいう「気持ち」には、次の二つの気持ちが想定できます。

1.「鳥を見たい」という気持ちの流れ
2.「お試し入会」に対しての気持ちの流れ

「探鳥会は楽しい」ということと、「お試し会員になりたい」ということは近いけれど、別の気持ちです。見て、楽しんでもらうことも大切ですが、「カワセミが見られた」→「きれいだ」→「念願かなった」というだけでは、１だけの心の動きとなります。これでは参加者はその場の満足だけで終わり、入会する人は少なくなってしまいます。

そこで、探鳥会で楽しんでもらうことと同時に、入会するとどんないいことがまっているのかのイメージをうまく伝える必要があります。

■参加者をその気にさせるポイント

では、参加者に探鳥会を楽しんでいただいて、お試し入会していただくためには、具体的にどのような点に気を配ればよいのでしょうか？

私が実践しているポイントをいくつかご紹介します。

＜冒頭でお試し入会制度のことを伝える＞

探鳥会の冒頭の挨拶で「お試し会員制度」があることを伝えておきます。ただしここで深く強く話しても、この後すぐ探鳥会があるので気持ちは上の空です。まずは制度があるということを頭にインプットしてもらう程度でよいと思います。

入会案内の資料についても、この場で配布しても効果は低いでしょう。一般的な例として、最初の挨拶の際に説明資料と申込書を配布し「興味のある方は後でお申し出ください」というやり方があります。しかし、新入会員を獲得することが目的であれば後で説明の時間を取るべきです。

逆に、最後の鳥合わせの際に資料を配布し、その場でまとめて説明し、勧誘する場合はどうでしょう？参加者の立場に立ってみれば、最後に突然お試し入会の話をされても、短時間では気持ちのレベルが高まりません。帰りの電車の時間が気になり申し込む人は少なくなってしまいます。お試し入会するレベルまで、心が熟成していく時間を確保することが必要です。

＜探鳥会の中で入会の魅力を伝える＞

では、どのようなタイミングでお試し入会についてお話しするのがよいのでしょうか？

私は、探鳥会の中で鳥のお話しする合間に、お試し会員制度、日本野鳥の会、支部の魅力について伝えています。

探鳥会の途中でこうした話をするかしないかで、入会の確率が大きく変わってきます。しかし、ここではあまり強すぎてはだめで、さり

げなくでよいと思います。相手は探鳥会を楽しみに参加している方です。お店に入るなり、店員が商品を強力に勧めてくる感じになってはだめです。お試し会員に入ってくださいという直接的な話ではなく、入ることの魅力の話がよいです。基本は、日本野鳥の会は堅苦しくマニアックな集団ではないことを伝えながら、入会することで得られる楽しさや喜びについて説明しています。

①探鳥会で鳥を見る楽しみ
②探鳥会や室内勉強会で知識を得る楽しみ
③自然保護に貢献する喜び
④仲間ができる楽しみ

＜可能な限り少人数の班編成にする＞
　ここでは、可能な限り少人数の班分けがよいと思います。その理由はなるべく自班のメンバーの参加者と話をしてもらうことで気持ちが動きやすくなるからです。

＜お試し入会の値段＞
　支部によって、お試し会員制度の価格は違うと思いますが、神奈川支部では 1000 円にしています。1000 円であれば、払いやすく、低価格、また半年間支部報を郵送する費用としても十分です。
　この価格は 100 円でも入らない人は入らないし、900 円にしたから入る人が 1 割増えるわけでもありません。価格は決めてしまえばあまり気にすることはなく、今のところこの価格でまったく問題ないと思っています。

＜最後の説明と入会の受付＞
　探鳥会の最後にもう一度制度の説明をします。それも班ごとが理想です。全体説明では他人事のように聞こえてしまうからです。班ごとであれば、リーダーと参加者の気心が知れた状態ですので、「あのリーダーにお世話になった」「あのリーダーがいるなら、探鳥会にいきたい」「仲良くなった参加者同士また会いたい」など心が動きやすくなります。班ごとであれば少人数のメンバー同士話が出来ます。「入る？そうします？そうしましょう！」などの会話がでることもあります。家族の場合は、お父さんお母さんは年配の方、娘さんが大学生くらいでしたが、娘さんがどうする？入ってみない？と相談し、両親がいいよとなり入会されたこともありました。
　また、少人数のメンバーでそのうちの何人かが申し込む場合、迷っている人がつられて申し込むこともあります。このタイミングで自分が担当する探鳥会の日時を伝えて、促すのもよいです。
　資料についてはこの最後のタイミングで、班ごとに手渡し、手に持ってもらいながら詳しい説明をした方がよいでしょう。

■ノウハウの水平展開を

　２月に鉄道会社と協働の探鳥会を実施し、27 組中 16 組（59%）がお試し入会してくれました。
　この時は全体を５班に分け、1 班あたりリーダー１名、参加者８名の少人数編成だったこと、冒頭、休憩時、最後と３回の説明が出来たこと、うち休憩時、最後のときは班ごとで説明が出来たこと、それぞれの班がフレンドリーな雰囲気になったことが高率の入会に繋がったと思っています。
　各支部でも、こんな話をしたら入会してくれたなど、「最後の決め手」や運営方法など色々なノウハウを溜めそれらを水平展開できればよいと思います。

（神奈川支部／樋口公平）

◆探鳥会保険集計結果（2016 年 2 月分）

2 月は 67 支部からご報告をいただき、計 270 回の探鳥会が開催され、のべ 6,609 人が参加されました。

表 1. 2 月の探鳥会保険集計結果（2016 年 3 月 15 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	1	20	2	1	23
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	−	−	−	−	−
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	0	0	0	0	0
滝川支部	1	15	1	1	17
道北支部	1	3	7	2	12
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	1	21	6	3	30
小樽支部	2	8	15	2	25
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	1	11	4	3	18
函館支部	0	0	0	0	0
道南桧山	1	7	0	2	9
青森県支部	−	−	−	−	−
弘前支部	2	14	0	3	17
秋田県支部	5	80	30	8	118
山形県支部	1	14	8	1	23
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	1	10	2	4	16
北上支部	1	9	1	4	14
宮城県支部	4	54	18	10	82
ふくしま	2	50	0	4	54
郡山支部	2	25	1	5	31
二本松	−	−	−	−	−
白河支部	1	2	0	6	8
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	0	0	0	0	0
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	9	104	77	15	196
栃木	−	−	−	−	−
群馬	12	142	60	40	242
吾妻	1	10	0	2	12
埼玉	15	409	152	113	674
千葉県	11	170	35	43	248
東京	15	545	21	76	642
奥多摩支部	18	235	62	54	351
神奈川支部	14	227	37	41	305
新潟県	1	26	0	2	28
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	2	34	11	2	47
石川	2	21	4	5	30
福井県	1	4	0	1	5
長野支部	1	31	4	2	37
軽井沢支部	–	–	–	–	–
諏訪支部	1	9	16	2	27
木曽支部	–	–	–	–	–
伊那谷支部	1	6	15	2	23
甲府支部	2	37	6	4	47
富士山麓支部	1	8	0	3	11
東富士	–	–	–	–	–
沼津支部	1	12	0	2	14
南富士支部	2	67	11	3	81
南伊豆	1	8	2	2	12
静岡支部	2	29	11	5	45
遠江	3	46	29	9	84
愛知県支部	13	159	140	34	333
岐阜	–	–	–	–	–
三重	4	37	19	6	62
奈良支部	5	126	31	11	168
和歌山県支部	1	4	2	2	8
滋賀	6	42	43	12	97
京都支部	7	99	24	15	138
大阪支部	21	399	88	90	577
ひょうご	8	91	63	26	180
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	21	12	3	36
島根県支部	1	9	4	1	14
岡山県支部	6	141	54	19	214
広島県支部	5	42	73	19	134
山口県支部	4	22	19	5	46
香川県支部	3	110	19	3	132
徳島県支部	5	60	18	5	83
高知支部	1	12	22	1	35
愛媛	4	48	36	8	92
北九州	4	39	3	4	46
福岡支部	6	100	32	10	142
筑豊支部	4	52	2	4	58
筑後支部	4	34	11	4	49
佐賀県支部	3	27	9	3	39
長崎県支部	–	–	–	–	–
熊本県支部	3	69	16	4	89
大分県支部	1	16	7	1	24
宮崎県支部	2	13	35	2	50
鹿児島	3	63	32	10	105
やんばる支部	–	–	–	–	–
石垣島支部	–	–	–	–	–
西表支部	–	–	–	–	–
全国	270	4,358	1,462	789	6,609

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

（普及室）

◆普及室からのお知らせ

■今年度も「探鳥会リーダーズフォーラム」を開催します！■

普及室では、全国の探鳥会リーダーを対象にした「探鳥会リーダーズフォーラム」を今年度も計画中です。このフォーラムは、探鳥会運営に関わる様々なテーマを分科会形式で語り合う場で、支部を超えたリーダー同士のつながりをつくり、探鳥会の質の向上を目指しています。

今年度は、西日本の支部の方にもたくさん参加していただこうと、東日本（1/28～29）と西日本（10/29～30）で１回ずつ開催の予定です。どちらにご参加いただいてもかまいません。皆さんのお申し込みをお待ちしています。

６月には探鳥会スタッフ通信を通じて皆さまにご案内できると思いますので、予定をあけてもうしばらくお待ちください

≪探鳥会リーダーズフォーラム in 西日本≫
【日　時】　2016 年 10 月 29 日（土）13 時
～　30 日（日）12 時
【会　場】　調整中につき未定
【主　催】　（公財）日本野鳥の会　普及室
【定　員】　50 名
【参加費】　１万円程度を予定

≪探鳥会リーダーズフォーラム in 東日本≫
【日　時】　2017 年１月 28 日（土）13 時
～　29 日（日）12 時
【会　場】　大学セミナーハウス
（東京都八王子市）https://iush.jp/
【主　催】　（公財）日本野鳥の会　普及室
【定　員】　50 名
【参加費】　１万円程度を予定

■「探鳥会リーダーズフォーラム」の分科会を担当してみませんか？■

「探鳥会リーダーズフォーラム」で分科会を企画、実施してくださる方を募集します！探鳥会にまつわることで他のリーダーと情報共有したいこと、話しあってみたいことがある方は立候補してください。

※分科会の開催については、内容や応募数を勘案し事務局で選定させていただきますのでご了承ください。

□応募要領□
【締め切り】　2016 年５月 15 日（日）まで
【所要時間】　分科会の所要時間は１時間 30 分と２時間の２種類の枠があります。
【役　割】　分科会の企画運営スタッフ、進行など。必要に応じて事務局でサポートさせていただきます。
※写真撮影と記録は事務局で担当します。

□応募方法□
企画する分科会について、以下の項目を記入していただき、５ 月 15 日までにメールで、tancho-staff@wbsj.org までお送りください。
① 参加会場：東日本会場、または西日本会場
② 分科会タイトル：内容がよくわかるもの
③ 分科会の内容：200 字程度
④ ご担当者：支部名、お名前、電話番号、メールアドレス

その他、詳しい実施条件については、普及室までお問い合わせください。

□お問い合わせ□
（公財）日本野鳥の会　普及室（堀本、箱田）
e-mail：tancho-staff@wbsj.org
電話：03-5436-2622

▲2015 年度八王子セミナーハウスでの様子

■2016 年「ツバメのねぐら入り観察会」の情報をお寄せください■

今年も、野鳥初心者にも関心を持ってもらいやすい「ツバメのねぐら入り観察会」を集約して広報し、一般の方が野鳥や当会に関心を持つきっかけになる場づくりをしたいと考えております。４ 月 ６ 日に連携団体の事務局宛に2016 年に予定されている「ツバメのねぐら入り観察会」情報提供のお願いに関する書類をお送りいたしました。

開催の予定がありましたら、５月５日（木）までに、

「タイトル、都道府県、開催場所、所在、交通、ＰＲ、開催日、主催、参加費、集合時間・場所、解散時間･場所、持ち物、備考（事前申し込みの有無、雨天時の実施の有無）」

を tancho@wbsj.org までお知らせください。

また、『ツバメのねぐらマップ』をご活用いただける場合は、お送りいたしますので、「必要部数」と「送り先住所」をお知らせください。

とりまとめた観察会の情報は、ホームページやパンフレット「探鳥会のご案内」、メール送信等で一斉告知し、特に会員でない方に、参加を呼びかけます。（野鳥誌７月号にも掲載の予定です）

ご協力よろしくお願いいたします。

■『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版の取り組み■

◇オオハシシギは普通か？

前号では、観察頻度を示す考え方について書きました。その中で触れたつもりですが、普通の鳥とは何か？・・・これが簡単には決められません。地域や時代によっても違うのは「珍しい鳥とは？」「どのくらい珍しいか？」も同じです。

日本鳥類目録では、少ない記録をIV=irregular visitor（不規則な飛来）、AV=accidental visitor（偶然の飛来）などに区分していますが、目録に掲載されていない観察例は多々あるし、目録と異なる見解も少なくありません。新版の観察頻度は目録７版を参考にしながらも、私自身の観察や全国各地の支部報などによる情報を加味し、さらに、各地の会員に尋ねたりしながら、私が判断しました。

私が増補改訂版を担当して普通に見られる種に●○△を記した後、新版で変えた例を紹介しておきましょう。ウミウは●（広い範囲で普通にいる）から○（範囲は広いが多くない）にしました。同じ頁のカワウの●とは差をつけたほうがよいと考えたからです。オオハシシギは無印から△（地域や環境によっては普通）にしました。全国各地の支部報など拝見していると、近年、観察例が増えてきているようです。無印、つまり普通でない鳥の定義は前号でも記したように「飛来が不定期」「とても少ない」ですが、オオハシシギは今やそうとは言えないと考えました。ただ、定期的に飛来している場所は多くはないと思われるので、△としました。

◇チュウジシギは珍しいか？

新版での●○△に、異論もあることでしょう。私自身が悩みに悩んだし、人に相談するほどにさまざまな見解が返って来ます。今も悩み続けている例としてチュウジシギを挙げておきます。

オオジシギやハリオシギなどの類似種との識別は野外では難しいとされてきたし、今も簡単とは言えません。が、近年は支部報などで、外側尾羽の色や模様、形状、枚数を確認するなどして、識別根拠をきちんと示している記録が増えてきました。時間をかけて観察し、慎重に検討すれば、定期的に飛来しているところは少なくないと思われます。△や○として、観察を促すべきとの意見もありました。

しかし、種を特定できないことも少なくない現実を理解できない人が増えるのは困るし、わからない時ははっきり「わからない」としていた故高野伸二の姿勢を思い出し、無印のままにしてあります。

ちなみに、これら通称ジシギ類の修正箇所には、解説では外側尾羽の違いの追記、図版ではハリオシギの肩羽の模様（タシギに似て見えた羽縁の白線の一部を削除）があります。高野図版のハリオシギのくちばしが長すぎたのは、増補改訂の際に修正しました。

ここで余談ですが、旅鳥のシギたちが北上する頃になると、シギが好きだった高野さんを思い出します。新版をお持ちの方は、P5 の高野さんによる「はじめに」をご覧下さい。私が希望して、右上に３種のシギが伸びをしている図版を並べてもらいました。私は、はじめ、識別が難しいシギたちを好きではありませんでした。森の小鳥よりも動作や行動を観察しやすい、その声は単純でも哀愁に満ちているなど、シギたちの魅力は高野さんに教えられました。

◇メジロの卵は緑っぽいか？青っぽいか？

新版に挟まれている「お客様アンケート」はがきが、たくさん戻ってきます。有難いことですが、関わった当人としては一喜一憂しています。「増補版と全然変わっていない」とか「掲載順を変えていないのはおかしい」など、中味をよく読んでいないと思われる意見や感想が少なくありません。そのような辛いはがきもある一方で、この連載を読んでいる方などからは具体的で、適切なご意見やご指摘をいただいており、感謝に耐えません。逐一返信できていないのは申し訳ないのですが、適切なご指摘については、例えば２刷りの段階で、どう修正すればご指摘を生かせるかなどを検討しています。

３月に、日本野鳥の会三重の研修会に呼ばれて出向いた際、「日本の野鳥識別図鑑」をネットで展開されている三曽田明さんから「新版では、どこをどう変えたのですか？」というご質問をいただきました。この連載で新版での修正やその背景を紹介してきたつもりですが、メジロの卵の色の書き直しについて、ちょうど実物が手元にあったのでお示しして、解説できました。些細な修正箇所ではありますが、誤りや至らなかった点を思い今も心休まらない身としては、僅か一文字の直しにも経緯があることを知っていただければ幸いです・・・

私が探鳥会などによく持参する、拾った羽や卵の殻などを披露していたので思い出したの

ですが、増補改訂版（P342）でメジロの卵を「緑がかった白」と書いたのを、新版（P348）では「青緑がかった白」に修正しました。

　増補改訂版で「古巣・卵・痕跡の見分け方」を追記した際、小海途銀次郎さんの著作『巣と卵図鑑』（世界文化社）を参考文献とさせていただきました。そこには、メジロの卵は「純白または淡青緑色で無斑」と書いてあり、５卵の図版はどれもやや緑味を帯びているように見えました。卵の識別はおまけのようなもので、字数を割くことができず、「緑がかった白」と大雑把にまとめた表記にしたのですが、その後、会員からもらった卵の殻には、緑系より青系に見える白もありました。小海途さんが書かれた「淡青緑色」が適切な表現であると、改めて考えた次第です。

（普及室／安西英明）

©谷口高司

▲新版で谷口高司さんに追加していただいた画像から、オニカッコウ（左：雄、右：雌）を紹介します。雄は光の具合によってはもっと輝いて見えることもありますが、好条件は例外的と考えて、地味めに描いてもらいました。

なお、先月号の画像の説明で「ヒメクイナ」を「ヒメクナ」と表記していました。お詫びして訂正致します。

◆今月の購読者数

探鳥会スタッフ通信４月号の電子メール版の購読者数は、先月から３名増えて 821 名です。支部ごとの購読者数は以下の通りです。

表 2. 探鳥会スタッフ通信４月号電子メール版の購読者数（2016 年４月 12 日現在）

支部	購読者数	支部	購読者数
小清水	1	福井県	10
オホーツク支部	6	長野支部	2
根室支部	0	軽井沢支部	2
釧路支部	2	諏訪支部	4
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	70	木曽支部	1
旭川支部	4	伊那谷支部	1
滝川支部	1	甲府支部	3
道北支部	1	富士山麓支部	0
江別支部	0	東富士	0
札幌支部	4	沼津支部	3
小樽支部	3	南富士支部	2
苫小牧支部	2	南伊豆	2
室蘭支部	5	静岡支部	3
函館支部	0	遠江	6
道南桧山	2	愛知県支部	33
青森県支部	1	岐阜	5
弘前支部	4	三重	19
秋田県支部	3	奈良支部	3
山形県支部	5	和歌山県支部	5
宮古支部	1	滋賀	19
もりおか	3	京都支部	31
北上支部	2	大阪支部	25
宮城県支部	39	ひょうご	15
ふくしま	3	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	11
郡山支部	1	島根県支部	2
二本松	1	岡山県支部	23
白河支部	2	広島県支部	8
会津支部	2	山口県支部	4
奥会津連合	0	香川県支部	6
いわき支部	1	徳島県支部	6
福島県相双支部	0	高知支部	1
南相馬	0	愛媛	14
茨城県	21	北九州	12
栃木	45	福岡支部	11
群馬	25	筑豊支部	19
吾妻	1	筑後支部	6
埼玉	37	佐賀県支部	5
千葉県	18	長崎県支部	1
東京	55	熊本県支部	14
奥多摩支部	47	大分県支部	3
神奈川支部	20	宮崎県支部	3
新潟県	1	鹿児島	3
佐渡支部	1	やんばる支部	0
富山	3	石垣島支部	1
石川	29	西表支部	2
		合計	821

（普及室）

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

★編集後記

桜の便りも北上し、東京では徐々に葉桜となってきました。

新年度に合わせまして、新小冊子「おさんぽ鳥図鑑」も無事発行となりましたので、今後、皆様にご活用頂ければ幸いです。気持ちの良い季節のおでかけにぴったりの冊子となっております。

また、「ツバメのねぐら入り観察会」の情報提供も宜しくお願い致します。五反田の事務所には「今年のツバメは・・・」という問い合わせの電話がよくかかってくるようになりました。一般の方の注目度はやはり高いようです！

先月、エナガがせっせと巣をつくっている様子を見つたものの、今月になって同じ場所を通っても場所がさっぱりわからなくなっていて少々残念。鳥たちが巣材を運ぶ様子を見ていると、早くも巣立ち雛の季節が楽しみになります。

（普及室／植木陽子）

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信　第37号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　2016年4月15日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田3-9-23丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org